

生産性向上による持続可能なすいか栽培を目指して

東北農林専門職大学附属農林大学校 野菜経営学科 秋葉 悠良

課題設定の理由

私の住んでいる山形県村山市は稲作とすいか栽培が盛んな地域である。私の祖父母もすいかと稲を栽培している専業農家である。山形県のすいかの出荷量は近年、減少傾向であり、これから高齢化が深刻になると作付面積や出荷量がさらに減少していく恐れがある。私は卒業後、即就農を考えているが、規模拡大ではなく、まずは単位面積あたりの収穫量を増やす生産性の向上を目指したいと考えている。そこで、株当たりの着果について検討し、単位面積あたりの収穫量の増加を目指す。



図1 収穫の様子（7月26日）

試験結果

- 1 果重は、慣行区が最も重く、区間差はなかった。（表1）
- 2 糖度は、いずれの区も出荷基準の11° Brix を大きく上回った。（表1）
- 3 商品化収量は、16本区が最も多くなり、目標収量の6 t を大きく上回った。（図2）

収穫時調査（8月1日）				5株平均
区	果重 (kg)	縦横比	果皮厚 (mm)	糖度 (° Brix)
子づる16本8果	9.4	1.02	12.2	13.2
子づる8本4果	9.8	1.02	14.1	13.4
子づる8本3果	9.7	1.04	13.8	12.3
慣行（子づる5本2果）	10.4	1.03	14.4	13.6

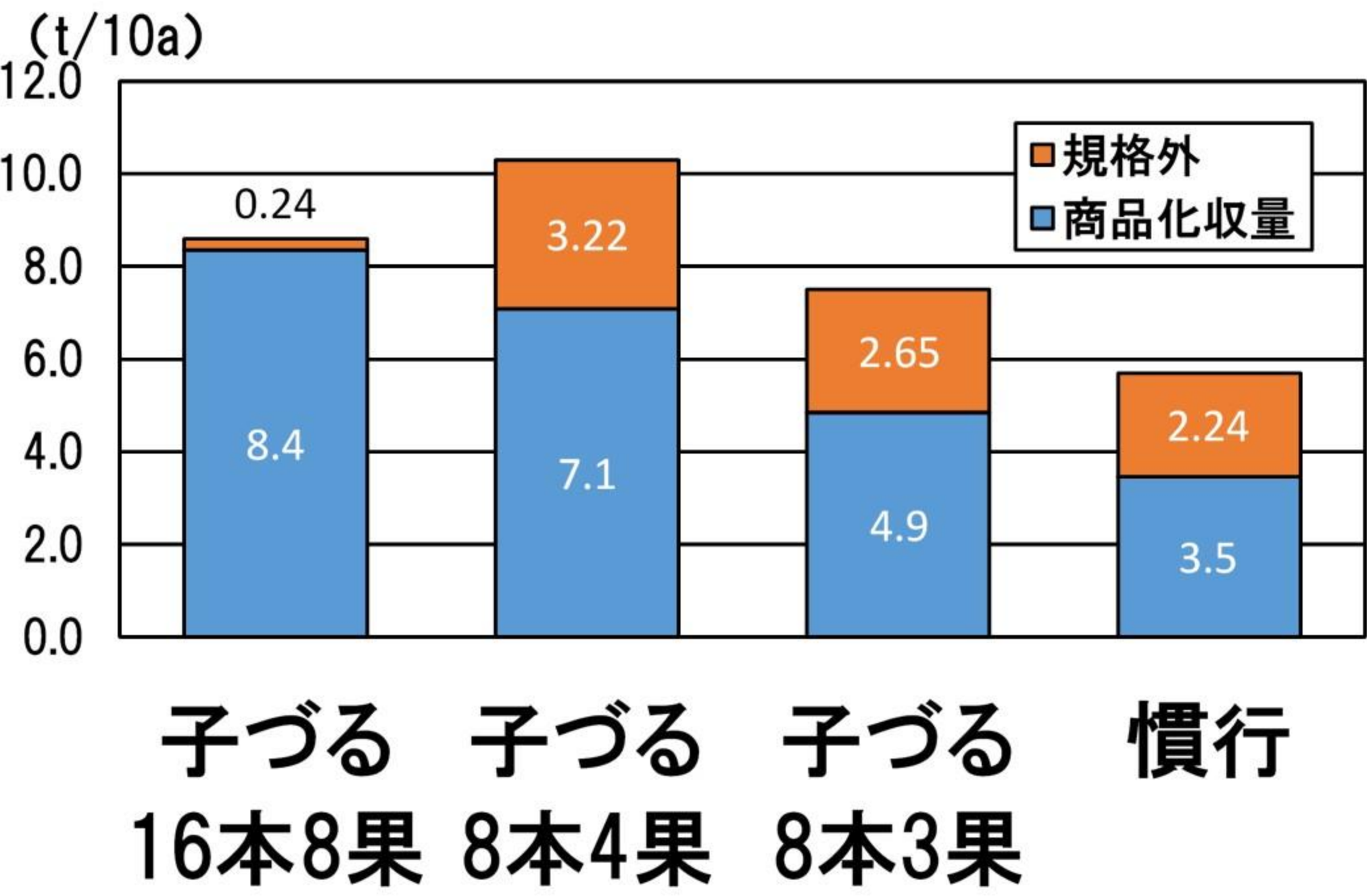


図2 収量

考察及び今後の課題

- ・子づる 16 本 8 果区と子づる 8 本 4 果区は、十分な商品化収量が得られたことから、いずれも生産性が高く今後の栽培において導入することが十分に可能であると考えられる。
- ・子づる 16 本 8 果区と子づる 8 本 4 果区は、つるの本数を増やしたことで、作業性の低下が懸念されたが、いずれの区も慣行区と同程度の作業性が確保されたため、経営的に有利な栽培方法であると考えられる。
- ・留意点は、過繁茂を防止し、適期防除を実施していく必要がある。

※参考文献等：スイカ果実における空洞発生と着果節位との関係（石川県農業短期大学研究報告）